



株式会社廣濟堂

グラフィックアーツのジャンルに注目し、インプレミアIS29で新たな価値創造を模索する。



代表取締役社長
浅野 健氏

「KOMORIの技術イノベーションと、われわれの利活用技術のイノベーションで、お客様に感動を」

1949年に印刷会社として創業した株式会社廣濟堂。1970年に日本で初となるコンピュータ文字組版システムを導入するなどデジタル化にいち早く取り組み、現在は、印刷とITを融合したワンストップサービスを提供している。今後のデジタル印刷事業を見据え、今年6月にインプレミアIS29（29インチ枚葉UVインクジェットデジタルプリンティングシステム）を導入し、新たな価値創造を模索している。浅野健社長にインプレミアIS29の可能性を、中村和久部長、藤井大祐チーフに、導入経緯や取り組みの内容などをお聞きした。

デジタル印刷ならではのビジネスモデルが必要

信頼性の最も高いメディアといわれている紙メディアが今後どうなるか、印刷業界のみならず、多くの人の関心事となっている。それに対して、(株)廣濟堂の浅野社長は、「紙メディアの良さは、一覧性の高さなどさまざまなものがありますが、今後、ハイクオリティなものにはプレミアムメディアとして価値を上げていくとみています」と語る。デジタル印刷は登場以来ずっと、印刷クオリティという面でオフセット印刷と

比較されてきた。

「デジタルが登場した当初は、オフセット印刷との品質の比較から入ってしまい、「小ロットの印刷物はデジタル」という単純な図式になってしまいました。しかし現在は、デジタルでなければ表現できない、デジタルならではのビジネスの在り方を創造していかなければならないと考えています」と浅野社長。今年6月にインプレミアIS29（29インチ枚葉UVインクジェットデジタルプリンティングシステム）を導入し、デジタルならではのビジネスモデルを模索している。導入の背景について「現場からイン

プレミアIS29を色校正で使いたいの声もありました。しかし、それは本来の使い方ではないと続ける。

「デジタル印刷機はドットロスを考えなくてもリニアに出力できます。インプレミアIS29を色校正に使う場合、色調再現力がオフセットを凌駕しているため、スペックダウンして使う必要があります。でもそれは本来の使い方ではありません。再現できる色調の広さをフルに生かす使い方が必要なのです」

具体的には、どのような使い方が考えられるのか。浅野社長は、その一つがグラフィックアーツのジャンルだと言う。

感性に訴えかける作品づくりがインプレミアIS29なら可能

「インプレミアIS29は再現できる色調の広さから、感性に訴えかける作品づくりの世界が広がります。私たちだけで何かをしようとせず、フォトグラフィやグラフィックデザイナー、イラストレーター、エディターなど、クリエイティブティの高き方々と組むことが重要です。そのために、私たちの感性を磨いていく必要があります。技術的に可能であっても、感性が反応しなくては作品づくりはできません」と、浅野社長。

中村部長も、インプレミアIS29の使い方を推進するには、クリエイターの理解が必要だと述べる。

「クリエイターはデジタル否定派が多いのが現状です。なぜならこれまで比較検討してきたデジタル印刷機は品質が

満足いくものではなかったから。でもインプレミアIS29の品質を見せた時、『これなら問題なく使える』という声がありました。その声に背中を押され、インプレミアIS29一本でいこうと決めました。今は多くの方に色域の広さや印字品質の高さを知っていただいている段階です。そのためにトップクリエイターの方と作品づくりを進めています」

色域について、出力チームの藤井チーフは、「当社は同人誌の仕事も多いのですが、オフセットではRGBで入稿されても、CMYKに色域を狭めて印刷していました。しかし、インプレミアIS29はRGBのデータをそのままの色域で出力でき、仕上りに納得していただいています」と広色域の強みを実感している。

また、中村部長はインプレミアIS29の選択理由として「当社が使っているオフセットの印刷用紙を網羅できていること」「両面をワンパスで刷れること」を挙げる。廣濟堂では出版社の仕事が多く、何十種類という用紙を使っている。インプレミアIS29なら、紙の種類を問わず、従来の品質を再現できているという。「Kカラーシミュレーター」の存在も大きい。中村部長は「当社では、Kカラーシミュレーターを色合わせの軸にしています。他社製のCMSソフトと比較しても低価格なのに、驚くような高性能でした。許容差は用紙の種類によっても異なりますが、△Eだと、1以内です。現在は、2以内ならコーサーインを出していますし、コート紙では1

以内でいけています。また、導入によって、プレスとプリプレスとの協働や連携が促進され、印刷物の品質も高まりました」と同ソフトを高く評価する。藤井チーフも「オフセットとデジタルを合わせ込む場合は、Kカラーシミュレーターを必ず使っています。チャートで印刷して、それを測色したデータを基にプロファイルを作成することで、いつでも正確に再現できます」と利便性の高さを語る。

デジタル印刷のノウハウを蓄積し次の時代で優位性を持つ

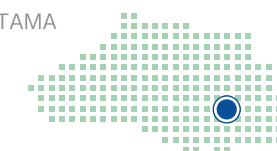
浅野社長は今後、インプレミアIS29を含め、デジタル印刷とどのように向き合っていくのか。

「デジタル印刷はまだ発展途上であり、印刷機の主流ではありません。しかし、3年経てば別の次元へと進化していることでしょう。デジタル印刷はIoTやAIなど、イノベーションのきっかけとなり得るものと親和性が極めて高く、それらに対応していくためにも、今からデジタル印刷のノウハウを蓄積していくことが大切です。KOMORIは技術のイノベーションでインプレミアIS29を誕生させました。私たちのイノベーションは利活用技術です。そして、『発注者にいかに感動してもらえるか』が責任だと思っています」

廣濟堂は今後、インプレミアIS29を使い、デジタル印刷機の利活用の革新を起していく。

専用のスペースに設置されたインプレミアIS29は、現在、高いクオリティが求められる案件をメインに活用している。

SAITAMA



本社 / 東京都港区芝浦1-2-3 シーパンスS館13階
さいたま工場 / 埼玉県さいたま市桜区町谷1-4-1
<http://www.kosaido.co.jp>
TEL / 03-3453-0550



さいたま工場



さいたま工場プリプレス部
製版課出力チームチーフ
藤井 大祐氏
「インプレミアIS29は段違いの色域。一目できれいだと思います」



さいたま工場制作部部長
中村 和久氏
「印刷はお客様に合わせて、いっしょに臆病になっていました。インプレミアIS29で、何か面白いことができそうです」

